キャラクター名
百々斗もも

プレイヤー名

シンドローム	エンジェルハィロゥ モルフェウス	ワークス	中学生	カヴァー	
オプショナル		年齢	12（13）	性別	女性

覚醒	犠牲	衝動	妄想	初期侵食率	30 %
出自	安定した家庭	経験	記憶喪失	邂逅	師匠

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値
肉体	1	0	0			1
感覚	5	1	3	1		10
精神	1	0	0			1
社会	1	0	0			1

HP	23
行動値	21
(非装備時)	21
戦闘移動	26
全力移動	52

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			ＲＣ	12		交渉	5	
回避			知覚	1		意志	3	1	調達		
運転：			芸術 :ダンス	2	3	知識：			情報： 噂話	1	
運転：			芸術： 歌唱	2		知識：			情報：		
運転：			芸術 :デザイン	3		知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		
運転：			芸術：			知識：			情報：		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
		0				

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ
ステージ衣装		1			〈芸術：ダンス〉ダイス+1

合計装甲：	1	合計回避：	0

所持品

思い出の一品	
思い出の一品	

ロイス

対象	感情(pos)	感情(neg)	タイタス	消費
母親	P 幸福感	N 不安		
記憶の中の誰か	P 懐旧	N 無関心		
玉野椿	P 尊敬	N 脅威		
羽衣きらら	P 友情	N 劣等感		
伏見或斗	P 感服	N 劣等感		
葛城 結衣	P 憧憬	N 脅威		
響乃律	P 親近感	N 不安		

最大財産P: 2	残り財産P： 0

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果： 非オーヴァードのエキストラ化								
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果： コスト分のHPで復活								
戦いの予感	3	2	ｾｯﾄｱｯﾌﾟ	至近	自身	自動		
効果： 1ラウンドのみ使用可。ラウンド間、【行動値】+[LV×10]。1シナリオ1回								
光の手	1	2	メ／リ			RC		
効果： 能力置換〈RC〉→【感覚】								
ペトリファイ	3	2	メジャー	視界		RC		
効果： 命中時、シーン中対象の【行動値】-[LV×2]。マイナーで解除可								
絶対の孤独	3	3	メジャー	視界	単体	RC		
効果： 命中時、ラウンド間、あらゆる判定ダイス-[LV+1]個								
ｺﾝｾﾝﾄﾚｲﾄ：ｴﾝｼﾞｪﾙﾊｨﾛｩ	3	2	メジャー			ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ		
効果： C値-LV								
クリスタルライズ	3	4	メジャー			ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ	100↑	
効果： 攻撃力+[LV×3]。装甲値無視。1シナリオ3回								
守りの砂	1	2	ﾘｱｸｼｮﾝ	至近	自身	RC		
効果： ドッジ可								
リフレックス：モルフェウス	3	2	ﾘｱｸｼｮﾝ	至近	自身	ｼﾝﾄﾞﾛｰﾑ		
効果： C値-LV								
フラッシュゲイズ	3	3	オート	視界	単体	自動	80↑	
効果： 対象が判定を行う直前に使用。判定ダイス-[LV×2]。1ラウンド1回								
朧の旋風	1	10	オート	至近	自身	自動	100↑	
効果： ドッジ成功直後に使用。メインプロセスを行える。行動済みでも行え、行動済みにもならない。10点を消費。1シナリオ1回								
天使の絵の具	★		メジャー	視界	シーン選	自動		
効果： 光を屈折させることで、あなたの望む映像を待機中に投影することができる								
テクスチャーチェンジ	★		メジャー	至近	自身	自動		
効果： 機能を維持したまま、物品の外見を変更する。どのように変更させてもデータは変更されない。								
効果：								

ももにはかつて、友人であり、姉のようであり、そして何より大切な宝物である、「きらら」という存在がいた。
小学校低学年の頃まで、ももはきららとたくさんの時間を共に過ごした。
二人で歌い、踊り、絵を描く。たわいもない会話を交わしながら、毎日がきらきらとした時間で満たされていた。ももにとってそれは紛れもない現実であり、疑う理由など一つもあるはずもない。だが、その関係はあまりにも脆い前提の上に成り立っていた。

きららは、ももが描いた少女――すなわち、彼女の想像の産物であり、彼女の創造したイマジナリーフレンドだったのである。
両親に買ってもらった、淡いパステルカラーのペガサスが描かれた表紙のおえかきちょう。そこには、幼い筆致で描かれた一人の少女がいた。決して上手とは言えない線でありながら、その少女は確かに“生きて”いた。歌い、踊り、ポーズを決める。衣装はページごとに変わり、フリルやリボン、テーマ性のあるデザインが施されている。拙さの中に確かな創造の芽が息づいていた。

それが、きららだった。

両親は始めこそ見知らぬ存在を語ることに驚きはしたものの、その存在を否定することはなかった。なぜならばそれは子どもの発育を促す行為、想像力が生み出す自然な現象として、ごく当たり前の行動であったからだ。だからこそ、ももはきららと過ごす日々を何の疑いもなく、受け入れ、「一緒にアイドルになる」という未来の約束を交わした。――その日までは。

ある日、ももの日常は唐突に崩壊する。
ジャームによる襲撃。破壊される家、失われる父親。逃げ場のない恐怖の中で、ももは覚醒した。レネゲイドに侵され、オーヴァードとしての力を手に入れてしまったのだ。助けを求め手を伸ばした大切な存在は、まるで幻想のように揺らめき悲しそうに微笑むだけであった。
その瞬間、幼いながらに彼女は直感的に理解してしまった。
きららは自身が生み出した創造の産物でしかないことを。
自分の力の本質が「想像を創造へと変換するもの」であることを。